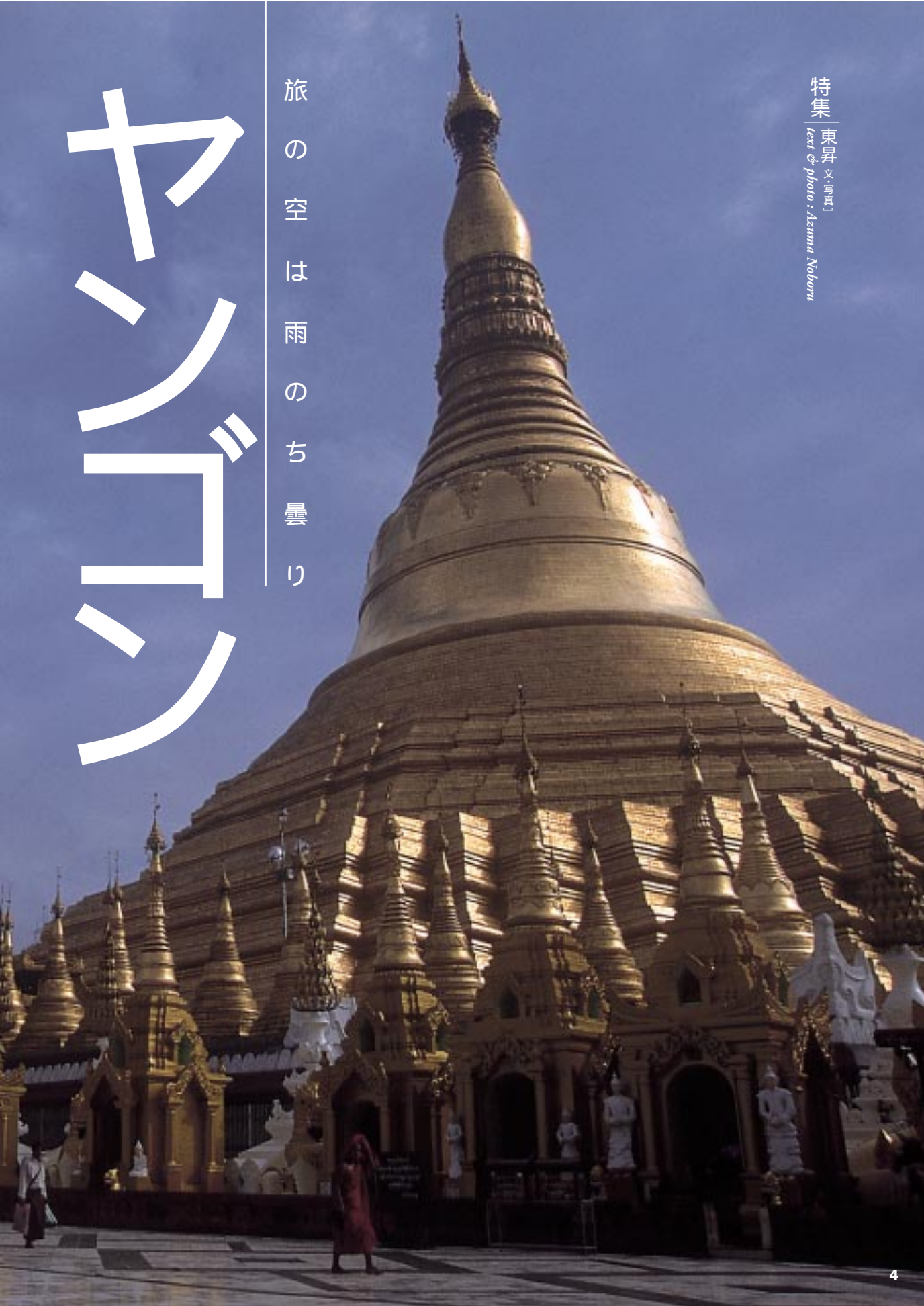


特集 東昇 文「写真」
text & photo : Azuma Noboru

旅の空は雨のち曇り

ヤンゴン



飛行機が高度を下げ始めた。眼下には青々とした水田が広がり、蛇行するイラワジの大河がそれらを切り取るようにして流れている。水田が終わった先には、疎な熱帯雨林がどこまでも続き、その緑のなかに時おり何かがキラリと光るのが見えた。

滑走路が間近にせまる。空港からそれほど遠くない丘の上には、シュエダゴン
の黄金の仏塔が雨雲を突き刺すようにそびえ立つ。上空から見えた閃光の正体は、雨季のつかの間の陽光を受けたこの巨塔の輝きだったのだ。

赤ラベルと555

雨季の旅にもよいことはいくつかある。旅行者が少ないこと、費用が安くあがること、そして真面目に観光しなかったのを天気のせいに行うことができること。私はときどき雨季を選んで旅をする。

雨季の最中だということもあって、バンコクからの飛行機はガラガラだった。この時間帯にヤンゴン国際空港に着陸するのはただ一便。入国審査は意外なほどあっさり済んだが、通関を出た後に200米ドルを額面上は同額のForeign Exchange Certificate = FEX (外貨兌換券)に強制的に両替させられる。ミャンマーでは飛行機のチケットや外国人が多く泊まる





シュエダゴン・パヤ

ヤンゴン郊外の小高い丘の上に建つ高さ98メートルの壮大な仏塔で、ミャンマーの仏教信仰の場として中心的な存在。250年以上も前に建立され、その後何度も再建された。釈迦の髪が納められていると伝えられる。塔の頂部には、76カラットの大粒ダイヤモンドを含む、ダイヤ、ルビー、ヒスイなどの宝石数千個がちりばめられている。中央塔の周りに多数の小規模な仏塔が取り囲むように建つ。

境内にある大きな釣鐘は、1824年の英緬戦争時に英国軍が川に沈めた鐘を、再び引き上げたもの。

【右】シュエダゴン・パヤで雨宿りする僧侶と参拝客

【左】参道の仏具店



ようなホテルの部屋代は原則として米ドル払いとなる。この場合はFECも米ドルと同様に使えるが、現地通貨のチャットに両替、実勢レートでの両替のこと。驚くなかれ、公定レートは実勢レートの約100分の1程度する際にはFECのレートは米ドルより1割ほど悪くなってしまう。つまり、両替した分の1割がお役人さんたちの懐に入るといっわけだ。

若い西洋人の旅行者が強制両替所の係官となにやら言い争っていた。どうやら両替を拒否しているらしい。『若いころは自分もあつて闘つたなあ』と思ひ出されてなんだか微笑ましかった。

かつてはビルマを訪れる旅人の多くが、バンコク国際空港の免税店で買ったジョニー・ウォーカーの赤ラベルと555シガレットを持ち込んだものだ。ラングーン空港の税関を過ぎると時には通関の前から、「たちまち、売ってくれ」と買い手が寄って来たので、すぐに売りさばくことができた。ウイスキーはジョニー・ウォーカーの、しかも赤ラベルでなくてはならず、黒ラベルを持ってきたために売れずに自分で飲んだ、という話を知り合った旅行者から聞かされたことがある。黒ラベルでは国民所得から考えると高過ぎて買ひ手がなかったのだろう。

FECのなかった当時、非現実的な公定レートではなく実勢レートで支払われ

るウイスキーやタバコの代金はけっこうありがたかった。そんな商いが国際空港でおおびらに行われるのを目の当たりにして、世の中にはゆるゆるの社会主義というものがある』という発見にえらく感動した記憶がある。

あれから空港も新しく建て替えられ、今ではさすがにそんな光景を見ることがなくなつた。

先ほどからビルマとミャンマー、ラングーンとヤンゴンと混ぜこぜに使つてしまつているのにお気づきだろうか、これは決してビルマはビルマ族の国を表わし、ミャンマーとは現政権が……などといった政治的見解を表わすためのものではなく、記述する物事の時代背景や筆者の経験と感情から来る単なる気まぐれなのだろうか大目に見ていただきたい。

ヤンゴンのへん

正規のタクシーがなかなか来なかったので流暢な英語を話す白タクの運転手と料金交渉をして市街地へ向かう。

「いいホテルを紹介するがどうか。市内観光はどうか」などと発展途上の国々ではおきまりの誘いを受けるが、必要ないといつて、

「そうですか、それではまたの機会に」



【右】道路標識にもロンジー姿の男性の絵
 【左上】スレー・パヤ周辺 左手の黄色い建物はシ
 ティーホール
 【左下】民族はちがっても二人は仲良し

と相手があつさり引き下がるのでいささか拍子抜けする。指定したホテルに着いたので金を払おうとする。
 「金を払つ前に部屋があるかどうか確かめてみたほうがいい」といふ。
 部屋があつたと告げると、運転手は満面に笑顔を浮かべて去つていった。
 それがいかなる形であれ独裁政治というものに私は反対する。断固反対するが、ミャンマーの人々が切ないほどのおおらかさを保つたまま、この21世紀を迎えられたのは、あるいは軍事独裁ゆえに世界から孤立し隔絶されて来たからなのかもしれない。

独立記念碑の立つマハバンドラ・ガーデンなどに囲まれているスレー・パヤはヤンゴン市の街のこの塔を中心都市計画がなされたといふ。
 スレー・パヤへの入り口はいくつもあつて階段を上がつた先にはそれぞれ派手な電飾をまとつた仏像が祭られている。仏像は全身金ピカであるか、あるいは肌の部分だけ黒、白にペンキで塗られている。
赤ちゃんは粉まみれ

宿の部屋の窓からはスレー・パヤへ仏塔(が目の前)に見えた。ミャンマーの仏塔は全面に金箔が貼られたものが多く、雨期ならまだしも、真夏の晴天の日などサングラスなしでは直視できないこともある。スレー・パヤもやはり金箔 一部は金むくらしい(が貼られている。高層建築がほとんどないヤンゴン市街で、高さ46メートルの仏塔はひととき目立つ。

仏塔はマハバンドラ通りとスレー・パヤ通りの交差点にあるロタリーの中に建っている。地元の人々は2000年の歴史があるといふが、現在の塔はあきらかに再建されたものと見える。
 シティーホールの巨大な黄色い建物

小雨の中をスレー・パヤからにぎやかなマハバンドラ通りを東に向かって歩く。水売り、低いテーブルを並べた食い物屋台、古本屋など、多くの露天商が店を開き、ただでさえ狭い歩道をさらに歩かなくともにしてはいる。

ビルマ系、インド・パキスタン系、中華系、カレンやシャンをはじめとするさまざまな少数民族たちが忙しく行き交う。アジア人ならだれでもここで自分こそつくりな人間を見つけたことができると断言できるほど、およそアジア人種として考えられる限りの肌の色、顔つき、体型の人々が入り混じっている。アジア各地を旅してきたが、このような都市を私は他に知らない。



男も女も多くがロンジーと呼ばれる腰布を巻いており、涼しげでなんと心地よさそうだ。普段着のようにも見えるが、ロンジーにサンダル履きは立派な正装だということだ。腰布自体は東南アジアでは別に珍しくはないのだが、ミャンマー人の男性はロンジーを末広がりに巻きつけるので、スカートをはいているようで、正直ちよつと「ミカルな感じがする。首都ヤンゴンですらロンジーを巻いた者のほうがスポンをはいた者よりも多い。横断歩道の道路標識を見かけたが、それにはロンジー姿の男性が道を横切る絵が描いてあった。

黄みがかった白色の粉を顔に塗っている人をそこら中で見かけるが、これは「タナカ」と呼ばれる粉を水で溶いて塗ったもの。日焼け止めと清涼作用があるという。顔の一部にだけ塗っている場合が多く、初めて見たときには、誰かにいたずらで白粉を塗られたのかと思つた。赤ちゃんなど雨季の間でさえタナカで顔を白く塗られていることが多い。

一時期、日本人の間で、戦時中に田中という人が日本の白粉を売ったのがきっかけで広まったという説がささやかれたこともあるが、タナカは柑橘系の樹を削って作ったもので、昔から使われていたそうだからどつやつやら田中説は全くのデマだったようだ。

イラワジ河

マハハンドラ通りから南へ曲がってイラワジ河の方に向かって歩く。この界限はさしずめ英国植民地建築の博物館のようだ。香港やシンガポールでは大部分が再開発で取り壊されてしまったが、ラングーンにはまだその多くが残り、かつ有効利用されている。

石柱、分厚い壁、時計塔、明らかに手入れ不足の物がほとんどで、それらは古くなったドライフラワーのようにかつての優美を偲ばせつつも崩れかけている。

イラワジの河岸に出る。材木を運ぶ船警備艇、小さな帆掛け舟、大河は美ににぎやかだ。対岸まで1キロ以上はありそうだが、埠頭から向こう岸へは大小の渡し舟がひっきりなしに出ている。黄衣の僧侶、回教徒、ヒンズー教徒、華僑など、ここでもさまざまな顔と装束をした人々が入り混じり、イラワジ河を忙しく往來する。

雨季の最中で水かさが増しているのに、も係わらず、イラワジの流れは這うようにおそい。外に向かって開かれ始めたこのミャンマーという国の歩みも、この大河の流れに似てゆつくりのように見える。あるいはどちらも穏やかに見えるのは、実は上辺だけのことで、奥底には急流が走

【右頁】雨宿りをする親子。赤ちゃんの顔に塗られているのがタナカ
 【左頁上】あちこちに残る英国植民地時代の建物
 【左頁下】イラワジ河の船着き場



ているのかもしれない。

ザ・ストランド

ボーイがドアを開けてうやうやしくお辞儀をする。ミャンマー人は駄菓子屋のオヤジだ。てうやうやしい。まして一泊400米ドルもするホテルのドアマンの一札がどれほど懇懇かは想像に難くない。泊り客のふりをするのは無理というものだ。部屋数30足らずの、しかもたいてい空いているこのホテルでは、ゲストの顔はたいていのスタッフに憶えられてしまっているからだ。

このホテルはシンガポールのラッフルズやペナンのE&Oのオーナーでもあったザキ兄弟により、1896年にオープンされた。ラッフルズなどに比べるとずいぶんこじんまりとしているが、それでも名前だけは、ちゃんと「ザ」が付いて威勢がよい。東南アジアの植民地ホテルとしては後発といえ、第一次、第二次世界大戦、ビルマの独立に社会主義化とつづき、植民地ホテルとしての華やかな時代は極めて短かった。全盛期には、スエズ以東で最も「と」つ、この種のホテルにはお決まりの使い古された謳い文句がストランドにも用いられていた。確か、スエズ以東で最

も： はて、なんだうたろう。80年代の一時期などは泊まり客の大半がヒッピーもどきの旅行者、という状態にまで落ちぶれていたが、90年代に入って新しいマネージメント会社により改装オープンされ、再び高級ホテルとして蘇る。そのかわり宿泊料は10倍ほどにもなってしまうが。

エヒを切るときに力を入れすぎて、銀のフォークが皿に強く当たった。カチャという音がレストラン中に響く。土曜夜7時、しかも明日からミャンマーは連休に入る書き入れ時のはずのホテルのダイニ



ングにほかの客はおらず、天井の扇風機がたてるハラムフといつかすかな音が聞こえるだけだ。橙色のタングステン・ライトに照らされた人気がないダイニングは、まるでセピア色の写真を見るかのようで、注文を取ってキッチンに姿を消したウェイターが、もう戻ってこないのではないかと一瞬不安に思ったほどだ。

もちろん給仕はちゃんと戻って来た。そして、スエス以东で最も空いているレストランで食べた淡水エビは殊のほか甘く、美味しかった。

クリスマス・エディション 1922

一杯やるうとホテルのバーに入る。他にも二三人の客がいるのがわかってなぜかほっとする。黒のマーブルの貼られたカウンターの真鍮のバー。カウンターの右奥には古いビリヤード台が呆けたように置かれていた。

ここでも天井には扇風機が回っている。ただの飾りだと思っていたが、どうもそうではないらしい。ランゲーンは電力事情が悪くよく停電する。それでたいていのホテルには自家発電設備があるが、発電量はホテル中のエアコンを全開にするには不十分なので、停電の時には扇風機は装飾品から実用品に変わるのだ。

バーに置いてあったランゲーン・タイム

ス(The Rangoon Times)の1922年クリスマス特別号のコピーを手取る。クリスマスだから堅く面白い話題は故意に避けているのか、あるいは本当に平和だうたのかはわからないが、目立ったコースは載っていない。

パフパラとめくって広告を眺める。ヨロバ往きの汽船、ホテル、スーツの仕立屋、中でもミロやオバルティンといった旧宗主国では昨今それほど人気がないが、かつて植民地だったアジアの国々では今も日常的に飲まれる麦芽飲料の広告が目立つ。この手の飲み物の広告にはたいてい椅子に座ってくつろぐ西洋人のマスターに召使が飲み物をサーブする絵がついている。召使は必ず色が黒く、そして決まって裸足である。現在なら大いに問題ありの図柄であるが、1920年代には間違いない。これがビルマのそして東南アジアの現実だ。たのらう。

日本のビールの広告が載っていた。コピーに「Always ask for ASAHI beer」とあり、製造元は「Dai Nippon Brewery Company Limited」となっている。日本にまだ「大」の字がついていた時代、そのアサヒビールの広告には二頭立ての馬車が大きなビール瓶を運んでいる様子が描かれていた。

「山田君、すまんがビールにビールを売りについてくれたまえ。西洋人も多いら

ミャンマーの概要

ミャンマーの人口は約5,000万人。ビルマ族、シャン族、カレン族、ラカイン族、モン族など、公に認められているだけでも100以上の民族が暮らす多民族国家。うち、ビルマ族が人口の7割を占める。

ミャンマー語が公用語だが、英語を解する人も多い。

国民の8割以上が仏教徒で、その他にはキリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教信者の順に多い。

1989年に現政権により国名がビルマからミャンマーへ変更された。

査証

ミャンマー入国にはビザが必要。アジアでは、東京、大阪、北京、香港、昆明、シンガポール、ソウル、ジャカルタ、ピエンチャン、クアラルンプール、マニラ、ハノイなどのミャンマー公館で取得できる。

ヤンゴンへの行き方

バンコクから空路での入国が一般的。シンガポールなどからの便もあるが、バンコク経由になる場合が多く、直行便は少ない。

宿泊

THE STRAND

92 Strand Rd., Yangon

Tel : +95-1-243377

Fax : +95-1-289880

イラワジ河畔に建つ部屋数30ほどの超高級ホテル。全室スイートで、宿泊料はオフシーズン料金でも200米ドル以上。

TRADERS HOTEL

223 Sule Pagoda Rd., Yangon

Tel : +95-1-242828

Fax : +95-1-242800

モダンな中型ホテルでビジネス客が多い。市街地ではストランドに次いで高級。部屋数407室。70米ドルから



右頁

【右】檳榔売りの親子

【左上】街のあちこちで見られる露店の古本屋

【左下】オンボロに見えるが意外にスピードが出るバス

左頁

【上】にじんまとしたストランドホテル

【右】静まりかえった夜のダイニング



しいし、暑いところだから、きつとたくさん売れるぞ。成績が上がるまで日本の土は踏まぬ覚悟でたのむ」
みたいなことを社長さんから言われて、社員は泣く泣く赴任したのかもしれない。果たしてビールはどれほど売れたのか。駐在員たちは売れ残ったビールをこたま飲んで毎日酔っ払っていた。なんてことはあるまいか。それにしても、1922年にラングーンで飲むビールはどんな味がしたのだろう。

いつも通りの暗い街

ホテルから出るとき、ドアマンは酒を飲みに通ってくる貧乏くさい客にも、お車を手配いたしましたよ、と今夜もいちおう聞いてくれるが、雨も上がったよ、うなので宿までの1キロほどの道を歩いてもどることにする。

「この夜もヤンゴンの街はいつものように停電した。時おり通る車のライトと窓からもれる自家発電の電燈の光だけを頼りに水たまりだらけの大通りを宿に向かつてそろそろと歩く。スレー・バヤがぼんやりと闇の中に浮かんでいるように見えた。その脇の歩道橋の階段には恋人たちが何組か寄り添って座っている。彼らのなかにこの停電に不平を言う者はいないだろう。」

宿の屋上からイラワジ河の方角を眺めると、微弱な電燈の光が黒漆に蒔かれた金粉のように広がっていた。それら光の粒々はイラワジ河のあたりまで来ると流れに飲み込まれるように突然消えて、その先はただ真黒な闇になる。
部屋にもどり、静まりかえったヤンゴンの闇の中で明日がいい天気であること、を願いながら床につく。時計を見ると、まだ10時を回ったばかりだった。